

# 茶の有機栽培におけるせん枝深さと翌年の一番茶収量

## [研究のねらいと取り組み]

- ・化学合成した農薬・肥料を使用しない有機栽培において、二番茶摘採後のせん枝を含む各種技術を組み合わせ、病虫害被害を低減させる防除体系を策定した（図1, 写真1）。
- ・二番茶摘採後のせん枝を深く行うことで秋季まで炭疽病を抑制できたが、翌年一番茶の収量が低下する傾向がみられたため、有機転換4年目の一番茶収量を確認するとともに、適正なせん枝の深さを明らかにした。

## [研究の成果]

- ・2018年及び2019年の一番茶では、前年二番茶摘採後のせん枝が深いほど、収量が低下する傾向がみられた（図2）。
- ・この傾向は、過去に一般栽培で行った、二番茶後のせん枝連年実施の試験結果と合致するものであった。
- ・二番茶摘採後のせん枝が深いほど、炭疽病の抑制効果が高いことが明らかとなっており、せん枝の実施にあたっては、炭疽病の発生程度を確認の上、中発生（病葉 50 枚/m<sup>2</sup>）未満ではせん枝の深さを 45mm 以下とすることが望ましい。

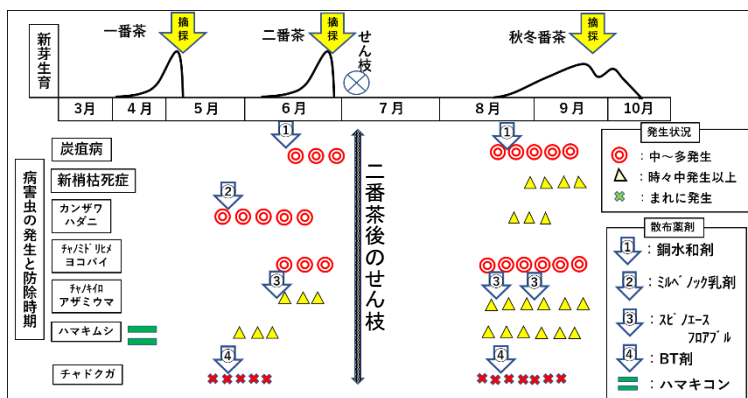


図1 有機栽培における体系防除案(平坦地向け)

写真1 二番茶後のせん枝状況  
手前 二番茶摘採面から-90mm、  
奥 -45mm、最奥 せん枝なし

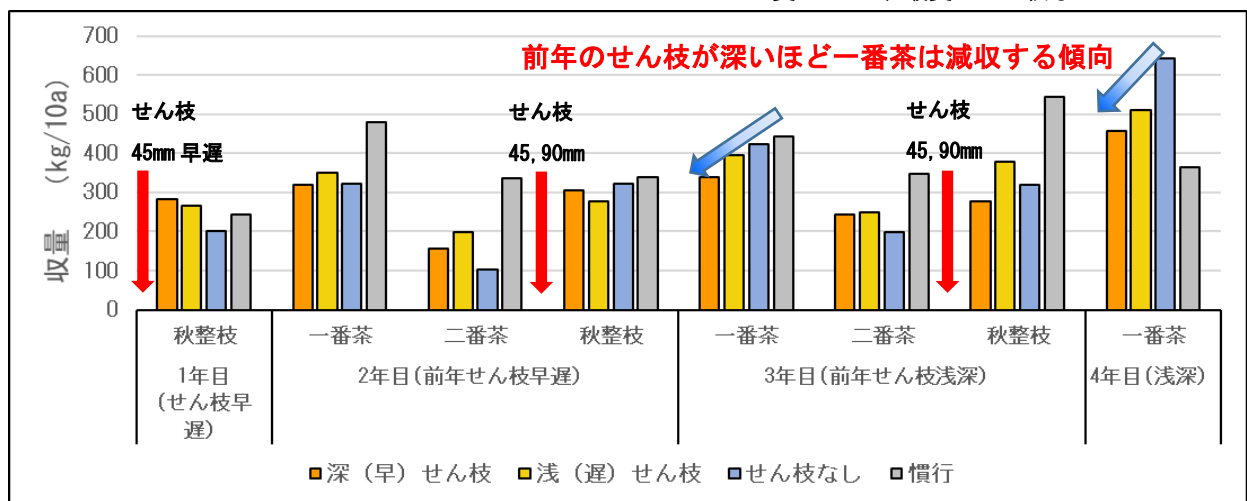


図2 二番茶後せん枝と翌年一番茶の収量の傾向 (2016~2019年)